

祝辞から

東京外国語大学教授
中嶋嶺雄

20周年というのは、ちょうど戦後の半分、日本が最も目覚ましく発展し国際化を迎えてきた二〇年を、大学セミナー・ハウスはともに歩んできたわけです。しかしながら国際交流も単に一時的な情報の伝達の時代ではなく、上部だけの交流ですまなくなっています。

私はこの夏、少し憂鬱な気分になっておりました。アメリカ有数のジャーナリスト、セオドア・ホワイトが、最近の日米貿易摩擦から大変厳しい日本批判をした。ミズリー号上で降伏文書に調印したとき、重光外務大臣が片足を引きずって船に上ってきたのを見て、何らの同情もなかった、憎しみの気持でいっぱいだった。今、また、日本に対してそういう気持を持っている、と彼は言うわけです。彼はもともとハーヴァード出身の中国通のジャーナリストで、私は専門柄、彼についてはよく知っています。これほど日米関係が理解し合えると思っているアメリカの中からの批判です。

そして9月のはじめに私はモスクワにおりました。9月3日の夜、火花が上がるととても華やいだ雰囲気です。それはミ

●文部大臣メッセージ●

⑥

大学セミナー・ハウスが昭和40年に当地、多摩丘陵において開館して以来、静かな自然環境の中で教授と学生との小グループが起居を共にし、思索、討議し、人格的接触を図りながら人間形成を行うことを目的としてその運営を行い、現在の姿にまで発展をみえましたことはまことに喜ばしいことと存じます。これもひとえに歴代理事長、館長、役員はじめ関係の皆さま方のたゆみないご努力の賜であり、深く敬意を表する次第であります。

近年、我が国の高等教育は著しい発展普及を遂げておりますが、その一方で大学の規模の拡大により、学生の人格形成に欠かせない教師と学生との親しい接触の機会が少なくなりがちであり、また豊

ズリー号の戦勝40周年のお祝いの火花でした。その夜、在モスクワ中国大使館では、クレムリンのアリエフ政治局員が中国の人たちと一緒に祝っていた。いってみれば戦後の日本の大きな発展が一週りして、少なくとも8月から9月にかけてはアメリカもソ連も中国も、日本に対して非常に厳しい姿勢で一斉に同一線上に立ったのです。

このことは、我々は国際化とか国際交流というけれども、アメリカの要求に応じて日本の防衛力を増強すれば、今度おそらく中国もソ連も批判するでしょうし、あちらを立てればこちらが立たず、非常にむずかしい時代になってきたことを示しています。

かな物質社会の中で、ややもすれば学生生活も厳しさを欠きがちであります。このような状況の中で大学セミナー・ハウスが「簡素な生活、高潔な思想」の信条の下に、教師と学生との人間的な触れ合いによる相互啓発と研修に協力されていることは、我が国の大学教育の充実にとって誠に意義深いものがあります。

また、大学セミナー・ハウスは「開かれた大学」という理念の下に、国公立の大学がその枠を超えて相互に交流することが出来る場を提供するとともに、学生に国際交流の場を提供するという観点から、内外の学生、教師が一堂に会する国際学生セミナーの開催等の事業を行っております。現在、我が国の大学に関し

わがセミナー・ハウスは、これまでの二〇年間、本当に素晴らしかったと思いますが、これから21世紀に向けてどう発展していくべきかを考えていかなければいけないと思います。そのためには、理事長がいわれたインターナショナル・ロッジの建設も、本当の国際交流を行うよい場所であります。もう一つは、今日ここで皆さんが参加している共同セミナーは、大学の単調な授業に数倍も倍る深い内容を持っているわけで、このセミナーがそのまま大学の単位として認定されるように、教育改革の一環をも担って、ご挨拶を終えたいと思います。

(前国際プログラム委員会委員長)

て、開かれた高等教育機関となること、あるいは一層の国際化を図ることなどが重要な課題として課せられていることに鑑みますと、大学セミナー・ハウスの果すべき役割は今後ますます重要なものになるものと考えます。関係各位におかれましては創立の理念にのっとり、全国の大学関係者の期待に応えるべく、常にその真価を発揮されるよう、一層のご努力をお願いしたいと存じます。

ここに大学セミナー・ハウスが開館20周年を迎えられたことに対し心からお喜び申し上げますとともに、今後の一層の発展を祈念いたしましてお祝いのごことばといたします。

昭和60年10月26日 文部大臣 松永 光

野村総合研究所員
金森 剛

私が最初にこちらへまいりましたのは昭和57年、社会学合同セミナーの準備委員としてでした。このセミナーは、第一回、第二回とも、先生方と企画室の企画で運営されていましたが、3回目に至り学生が自分たちで運営して新しい内容を創造しようという話が出てきたのです。

私は第3回セミナーで次の二つのことを経験しました。一つはクールな経験です。委員の立場で宿泊の手配やら会議の司会役、一〇〇名に及ぶ学生のまとめ役